

# 郷土資料の作成と活用に関する研究

- 副読本「かわさき」の編集を通して -

郷土資料編集会議

研修員 中川 通彦（川崎市立向丘小学校）

佐藤 俊司（川崎市立末長小学校）

小松 典子（川崎市立王禅寺小学校）

栗林 昌人（川崎市立宮崎台小学校）

研修指導主事 前島 和樹

## 主題設定の理由

### 1. 副読本「かわさき」作成の意義

(1) 子どもを取り巻く状況から

地域とのかかわりが薄い、身近な人との出会いが少ないという子どもの実態がクローズアップされている今日、地域とのかかわり、身近な人との出会いの機会が重要視されている。地域の一員として日々の生活を送っている空間である地域を今一度子どもたちの側に引き寄せていく必要があるということである。

社会科学習においては、社会的事象の意味を観念的な理解に終わらせないためにも、子どもたちに具体的な地域の様子を見せることが大切である。見学や調査などの活動を取り入れ、人の営みを通して地域の社会的事象の特色や相互の関連について考える学習を展開していく必要がある。

このように地域とのかかわりや地域学習の重要性を考える上で、身近な「人・こと・もの」に出会うことができる副読本は、今後更に大きな役割を担ってくると考える。

(2) 社会科の目標から

今年度より全面実施を迎えた学習指導要領に示されている社会科の目標は従前通りであり「...(略) 公民的資質の基礎を養う。」とされている。この「公民的資質を」を小学校社会科学習の中でどのように養っていけばよいのか。発達段階に合わせた各学年の目標を見ていくと、地域を基点として、徐々にその範囲を広げていっていることが分かる。第3・4学年では生活の舞台である地域の「人・こと・もの」に学ぶことにより社会的事象の見方・社会生活の在り方を学んでいく。そして、この学びで得た『もの差し』をもって第5・6学年の学習に移行する。つまり、地域という物差しをもつことにより初めて日本、そして世界へと目が向けられるのである。その意味においても、地域学習の重要性は非常に大きいものがある。この物差しをもつための教材が副読本である。

(3) 地域学習における教科書の限界から

今改訂において、第4学年と第5学年に分かれていた国土の学習が、第5学年に集約された。これを受け、地域に密着した学習が一層弾力的に展開できるようになった。ところが、教科書の記述は子どもたちの住んでいる地域とは当然のことながら異なった地域を扱っている。社会的事象の一般化、概念化を図るという点では有効であるが、子どもたちの興味・関心、発達段階を考慮すると教科書活用の限界が感じられる。

(4) 授業改善の視点から

今改訂の社会科改善の基本方針を受け、授業への改善が求められている。社会の出来事や事柄、地名や年号などの細かな知識を覚える学習から、子ども一人一人が観察・調査、体験などの具体的な活動を通して、社会的事象の意味や働きなどを考えたり自分の意見を述べたりする学習指導への改善で

ある。これらのことを考え合わせると、これからの副読本の在り方としては、従来行われてきた、教師が副読本の内容を子どもたちにどのように教えるかという学習から、子どもたちが副読本を一つの資料として主体的に活用していく能力の育成が図れるものでなくてはならない。

以上の考え方をもとに、本研究では次のような主題を設定した。

【研究主題】

## 郷土資料の作成と活用に関する研究

### ．研究の内容

#### 1．研究の方法

副読本作成の意義と昨年度までの研究の成果を踏まえ、これからの副読本の在り方について考察する。具体的な取組としては、以下に示す3点である。

基本構想に添って「調べて考える」副読本を作成する。

活用方法を記載した学習指導資料集（仮称）を作成する

副読本をより効果的に活用するためにDVD教材を開発する。

#### 2．研究の内容

（1）調べて考える副読本「かわさき」の作成

子どもたちが意欲を持って主体的に学習に取り組んでいくためには、社会的事象を自分の問題としてとらえ、様々な解決方法を駆使して、友達の意見と自分の考えをすりあわせながら、自分なりにまとめていく活動を繰り返し経験していくことが大切である。そこで、次期副読本の編集の基本方針として「従前のような内容解説型の副読本から脱却し、調べて考えることができる副読本の編集」とした。そして、以下に示す能力の育成を図ることができる副読本の編集に当たった。

問題を発見する力の育成が図れる副読本

問題解決的な学習を進めるための第一歩は、問題を発見することにある。取り上げる社会的事象、それに伴う資料を吟味、選定し、子どもたちにとって「不思議」がたくさん詰まっている事象と資料の提示を心掛けた。具体的事実を見つめることにより、今まで気にもとめていなかったことが「分からない」「どうしてなんだろう」と思えてくるような事象と資料の提示を第一に考え、編集に当たった。

資料を活用する力の育成が図れる副読本

副読本の命は資料であるといっても過言ではないが、資料から事実を読み取る力が備わっていなければ問題を発見、追究、解決していくことはできない。事実を認識することが問題解決の始まりとなる。写真、地図、統計資料、年表、働く人の話等を目的・発達段階に即した形で提示し、学習を進める中で資料の見方、事実を読み取る能力や技能の育成を図ることができるような副読本の編集に当たった。

考える力の育成が図れる副読本

主体的な学習を展開する際に本来は、問題は一人一人個性的なもの（社会科のねらいから逸脱していないことはもちろんのことであるが）である。ましてやその問題が自分の生活とのかかわりの中から生まれてきたのであればなおさらである。地域に学習の場を求めることのメリットがまさにそこにある。目には映っていても見えてこなかった地域の「人・こと・もの」を教材化することにより、自分の生活とのかかわりの中で調べたり、考えたりすることができるような副読本の編集に当たった。

今日的課題への対応が図れる副読本

「共生」は21世紀を生きていく上でのキーワードになる。これからは、人と人との共生ばかりでなく、人と自然との共生も図っていかなければならない。

- ・人と人との共生 「国際理解」「平和」「人権尊重」「福祉」
- ・人と自然との共生 「環境」

これら今日的課題に対しても、身近な川崎を窓口として学習を進めていくことは意義のあることと考える。自分たちの足下を見つめ、考えるきっかけがつかめる副読本の編集に当たった。

#### 学び方を学ぶ副読本

変化の激しい今日、新しい知識や技能を身につけても数年、あるいは数ヶ月を経てしまえば使い物にならない状況も出てくる。しかし、身につけた知恵は一生モノである。学び方の基礎を身につけるということは生涯学習の基礎を身につけることである。そこで、吹き出しを活用して調査・観察・資料収集等の示唆を与えたり、様々な人々へのインタビューを囲み記事として提示したりして、子どもたちに多様な学習活動を促すような構成を考え、編集に当たった。

#### 高学年での活用が図れる副読本

次期副読本は高学年での活用を視野に入れている。教科書や市販の社会科学習資料集に記載されている標準的な教材だけでなく、子どもたちの身近な地域に見られる歴史的な事象を教材化することにより、生き生きとした学習が展開されることを平成13年度までの検証授業からも明らかになった。そこで、従来の地理的分野を中心とした編集方針に加え歴史的分野を充実させることで、川崎を空間的な広がりだけでなく、時間的な経緯からもとらえることができるようにしたいと考え、編集に当たった。

### (2) 学習指導資料集の作成

#### 作成のねらい

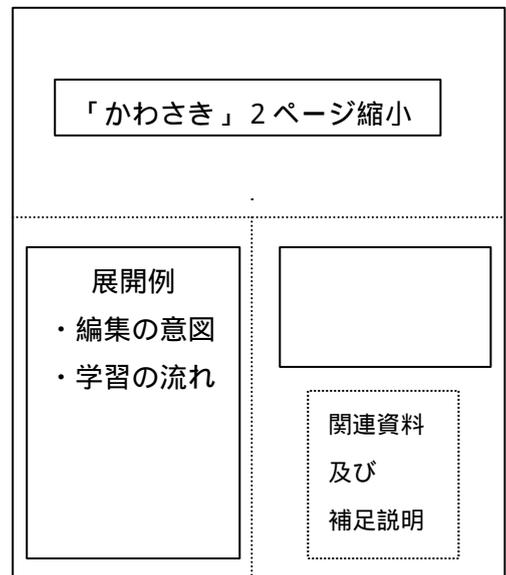
副読本「かわさき」をより効果的に活用するために学習指導資料集を作成する。

#### 編集の基本方針

- ・実際の授業で活用するために展開例を示す。
- ・紙面の関係で掲載できなかった関連資料を紹介する。
- ・補足説明が必要な資料に関して簡単な解説を加える。
- ・巻末に「郷土川崎ミニ事典」のページを設け、川崎の歴史や統計資料を掲載し、資料性を高める。

#### 編集の具体化

- ・上下二段組。上段に副読本「かわさき」の見開き2ページ分を縮小したものを載せる。下段に展開例。
- 必要に応じて、関連資料及び補足説明の欄を設ける。
- ・本文及び「郷土川崎ミニ事典」は横二段組。



### (3) DVD教材の開発

#### 開発のねらい

副読本「かわさき」をより効果的に活用するためにDVD教材を開発する。

- ・写真からイメージを膨らませることが難しい場面を動く映像によって補う。

#### DVD教材のメリット、デメリット

DVD教材は、あくまでも副読本「かわさき」を補完するものである。副読本の各ページのねらい

から逸脱せず，子供たちの学習効果を第一に考え構成を図っていくことが必要である。取り扱いを誤り，本末転倒に陥らないようにするためにもメリット，デメリットを明確にしておく必要がある。

メリット	デメリット
<ul style="list-style-type: none"> <li>・映像がクリア。劣化しない。</li> <li>・見たい画面に瞬時にいける。</li> <li>・子どもたちの興味・関心が高い。</li> <li>・活動の実態や変化していく状況の把握がしやすい。</li> <li>・実際には見学・観察が難しい事実を見ることができる。</li> <li>・選択肢があるため，一人一人の欲求に応じることができる。</li> <li>・ナレーションが選択できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選択肢が多いので，選べない子どもはとまどう。 教師の支援が必要。</li> <li>・画面に流れているときだけであとは消えてしまう。 写真や絵図との組み合わせが必要。 (副読本との併用)</li> </ul>

#### D V D教材開発予定

副読本との組み合わせを考え，今年度以降、順次以下のD V D教材開発に取り組む。

子どもたちが実際には見ることができない上空からの景観を中心に。

「川崎区」「幸区」「中原区」「高津区」「宮前区」「多摩区」「麻生区」← 今年度作成  
「多摩川に沿って」

見学が難しいもの

「北部市場の様子」「川崎の民俗芸能」

子どもたちにぜひ見せたいもの…働く人の姿

「メロンを作る井上さん」「ものづくり共和国の様子(中小企業の工夫や努力)」

残しておきたいもの

「戦争体験者の声(空襲,疎開,生活の様子)」

## 研究のまとめ

現行副読本は，平成5年度に発行され10年目を迎えている。幸いにして本研究会議は，現行副読本が発行されてから現在まで途切れることなく続いている。その間に行われてきた検証授業の考察と今改訂の社会科改善の基本方針を受けて，従来の内容解説型の副読本から脱却し，調べて考える副読本への転換を目指して現在改訂作業を進めている。本研究を仮説検証型と捉えた場合，現時点では仮説を立てているところである。次期副読本の作成自体が仮説であり，最終的な検証は市内の教師，子どもたちが実際に副読本を手にしたときから始まる。その意味では，研究の成果というものを現時点で挙げることはできない。強いて挙げれば，「川崎発の学習」を常に意識するようになり，改めて地域を学習の基盤に置くことの大切さが分かってきたことである。地域は日本に繋がりが，世界に繋がっていく。また，日本や世界の縮図は地域にある。これは，地域学習によって得た物差しをもって世界を見ていくことを意味する。

今後の課題は山積しているが，現在作成中の副読本を実際に授業の場面で活用し，資料提示の方法と掲載資料の有効性に対する検討を加え，よりよい副読本の作成にあたっていくことが第一であると考えている。